

## デュラス夫人の『ウーリカ』(一)

片山正樹

- I 序 説
- II 黒人修道女ウーリカの物語
- III デュラス夫人と当時の女流文学
- IV 結 論

## I 序 説

十九世紀のフランス小説を見わたすと、黒人を主人公にした作品を、いくつか数えることができる。たとえばユゴーが十六才のときに着手した小説で、後年の作風をすでに予測させる『ビュグ・ジャルガル』(一八二二)、短篇集『モザイク』におさめられていて、日本でもよく知られているメリメの『タマンゴ』(一八二九)、そして二十世紀になつてから前衛文学者たちに注目された暗黒小説、ウージェーヌ・シュエの『アタール・ギユル』(一八三二)<sup>(1)</sup>などがま

ず思い出されよう。いずれの作品も、黒人奴隷の反逆をテーマにしている、そのうえ、申しあわせたように主人公の黒人男性の名前を

タイトルに用いている。これは偶然とは考えられない。表題に耳慣れない人名を使うことは、当時の読書界に流行していた異国趣味を意識したものだ。また内容が粗暴な点は、おそらく一七九一年のサント・ドミンゴでの白人虐殺事件が反映したものと思われる。

アフリカの奴隷をあつかった物語は、暴力、残酷、不正、陰謀などの要素が、冒険心や英雄主義とからむことから、荒々しいものとなるのは当然であろう。しかし、そういう特性とは異質の、穏和でありながら痛切な、そして忘れられた作品が存在するのである。主人公は、黒人ながら、女性というのもめずらしい。

デュラス夫人(一七七七一—八二八)の中篇『ウーリカ』(一八二三)は埋もれた小傑作である<sup>(6)</sup>。発表当時は各界のひとびとの話題となっていたいへんな評判を得た。ウーリカの悲話は流行したとすることができる。劇化され、数カ国語に訳され、歌や絵のモチーフとなり、さらには、帽子や飾り衿にまでその名が用いられたのであった。ゲートは「こんなに感動するのは、この歳では体に毒だ」という意味の言葉を洩した。そして机上のウォルター・スコットの小説本を片づけさせ、『ウーリカ』のそばに他の小説を置くことを、三ヵ月ほど差し控えるように命じたと言われている<sup>(6)</sup>。

これほど注目された物語の作者デュラス夫人は、けっして文学者ではなかった。しかし親友シャトーブリアンから称揚され、想像力をスタール夫人に、感受性をラ・ファイエット夫人に比較される知識人であった。サロンを開く名門の夫人として、たまたま耳にした薄幸の黒人少女の身の上話を巧みに語ったところ、仲間から文字にするようすすめられた。その結果、公爵夫人が作家と呼ばれる機縁が生じるが、控え目な性格なので、手稿を友人たちに朗読するだけに甘んじていた。やがて一八二三年に出版を承諾したのは、周囲の強い要望に応じたものであった。

『ウーリカ』の大成功のあと、身心の苦痛をまぎらすために、夫人は文筆にいそしむ。『エドゥアール』(一八二五)は、成就しない愛という点で、『ウーリカ』とテーマが本質的に似ている。それにつづく『オリヴィエ、または秘密』(一八二六)が、スタンダールの『アルマンズ』(一八二七)ならびにラトウーシュの『オリヴィエ』(一八二六)と興味

ある関わりを持っていることは文学史上のエピソードとして知られている<sup>(4)</sup>。

本稿では、デュラス夫人の第一作『ウーリカ』を取りあげて再評価したい。その理由は、つぎの三点である。

まずこの中篇小説が、内容、文体、構成などの点で文学作品としてすぐれていること。これまで、作者が貴婦人であることがわざわざいしてか、素人の手すさびと受けとられ、過小評価されてきたように思われる。

つぎに、十九世紀初頭の女流文学者の活躍を考察することは、女権運動に寄与するばかりでなく、文学史のうえで特別の意味を持つこと。フランス大革命の直後には、各方面で女性の進出が多く見られたが、とりわけ文学の世界に新しい世紀を開くことになった<sup>(5)</sup>。

さらに、この作品に見られる白人社会での黒人の立場の悲劇が意味するものが、現在もなお過去の歴史になりきっていないこと。人種や国籍がもたらす問題について文学が果たしうる役割の一面を、百六十年まえにパリのサロンで生れた物語が立派に示している。

それでは、『ウーリカ』とはどのような物語なのか。また、どのような語り口に読者は感動したのか。また日本に紹介されていないこの作品<sup>(6)</sup>の筋書を、具体的に引用をまじえながら、詳しく追うことにしよう。

## II 黒人修道女ウーリカの物語

修道女ウーリカの身の上話というかたちのこの一人称の物語には、導入部として、聞き手になる医師の手記が添えられている。

大革命の記憶も遠ざかって、ナポレオン皇帝が修道院の再開を許しはじめたころのパリ。ある医師が往診を求められて修道院に出かける。そして患者が黒人の修道女であったことに驚く。「その驚きは、相手の礼儀正しい挨拶ぶり

と立派な言葉づかいに、いっそう大きくなった。——診ていただきます病氣は、さぞ重いものに思われます。いまだこそぞひ癒りたいと望んでおりますが、ずっとそう願いつづけていたわけではございません——(…)極端に痩せていて、顔に、輝やく大きな目と、まっ白な歯が光っているだけだった。魂はまだ生きているものの、肉体は亡びており、体じゅうが長期間の激しい苦悩を示している。」

治療するには原因を知らねばと、悩みにみちた過去を詮索する医師に、若い娘は「わたくしは深く苦しみましたので、しだいに健康をそこねておりました。衰弱するのを感じながら、喜んでおりました。なぜと申して、行く末にどのような希望もなかったからです。」と答えるばかりであった。

容態から「すでに手おくれで、死神が狙いをつけていると感じていた」ものの、医師はあらゆる手段をつくして救おうと決心していた。その熱意にはだされた患者は、何度目かの往診のとき、ついに次のような打ち明け話をしたのであった。

「わたくしは、二歳のときにセネガルから、総督をしておられた勲爵士さまに連れられてまいりました。ある日、港を出ようとする奴隷船に黒人たちが乗せられるのをごらんになって、わたくしを哀れに思われたのです。」「フランスに着くと、幼児はB元帥夫人のもとに贈られる。夫人は「当節またとないほどの好ましいお人柄で」、最高の能力と無限の優しさを合せ持った女性であった。奴隷の身分から解放されたうえ、夫人の庇護のもとに置かれたことは、いのちを二度ささずかったようなものと回想するウーリカ。それを幸福と感じなければ、神様に申しわけないといいながらも、不幸が起る原因が知性にあると判断する。「幸福というものは、知力を身につけることから得られるとのことです。わたくしはむしろ反対だと思えます。知識のお蔭をこうむったら、あとで、無知のほうがまだましだったと考えずには済まないようです。」

豪勢な客間で「東洋ふうの服装で夫人の足もとに坐りこんで(…)その時代のもっとも優れた人士の会話を聞いて

いた」幼いウーリカは、夫人とその友人全員から可愛いがられ、甘やかされ、贈物攻めにあつて「もつとも利発な、もつとも愛らしい子供として、賞めそやされ、持てはやされて」日々を送る。そして、黒人であることを意識することもなく、「幸福な生活のかたちが他にもありうることは考えもせぬまま」十二の歳を迎える。同年輩で、夫人の孫のシャルルは、ただ一人の遊び仲間だったが、すでに学寮にはいつてしまつていた。彼女も夫人の意向に添つて、教養を身につけねばならない。「夫人はあらゆる技能を身につけさせようとなさいました。わたくしの声がいいとなると、一流の先生が歌を教えに見え、絵ごころがあるとなると、お知り合いの有名な画家が指導してくださいというありさまでした。英語もイタリヤ語も習得しましたし、読書指導は夫人ご自身が買つて出て、わたくしの知能を啓発し、判断力を養つてくださいました。」

なんの屈託もない幸福な少女に、致命的な事件が起る。ある日ウーリカは、絵をかくのに熱中して、客間の屏風のかげのテーブルにいた。そのことに気づかず、夫人と友人の侯爵夫人が内証話を始めたのである。「さいわい、二人きりだから、ウーリカのことをお話ししておきたいの。(…)すてきな子になってきたわね。(…)何でもこなせるし、気が利いていて、伸びのびして……でも、いったいどうなるのかしら。ほんとうに、あの子をどうなさるおつもり」「それがねえ……ほんとうを言うと、困つてしまつていて。娘同様に思つているから、幸せにするためになら何だつてしますけれど。でも、あれの立場をよくよく考えると、どうにも解決のしようがないことがわかるし。かわいそうなウーリカ……。独りぼつちなのだわ。永久にこの世で独りきりなのよ……」

雷のような衝撃を受けたウーリカは、目の前がまっくらになり、しばらくは耳をそばだてる力も失せる。そのうちまた話のつづきが聞えてくる。「どんなひとに添わせるおつもり。あの才気だし、あなたの与えた教養があるのよ。(…)ウーリカの幸せを考えるのなら、平凡な娘に育てるべきだったわね。」ウーリカが「自分の運命を乗り越えるだけの力を」ふるうはずという夫人の反論に対し、物事を冷静にとらえて割り切る相手は容赦しない。「たしかに、知

恵をしぼって運命を変えていくことは、できないことではない。けれども自然の掟のまえでは、知恵の力もむなしなものよ。ウーリカは自然のさだめに従わなかった。この社会に勝手にはいりこんだ。しつべ返しを受けずには済まないでしょう。」

その場を逃げ出した黒人の少女は、自分の部屋で涙に暮れるしかなかった。「わたくしは絶えまなく練りかえしていました。独りぼっち、永久に独りきり……。ほんの前日まで、孤独というものには何の関心もありませんでした。

(…) わたくしは愛する対象を必要としていました。その愛の対象がわたくしを必要としないなどは、夢にも考えていませんでした。」

ただならぬウーリカの変わりように、夫人をはじめみな驚き、心配するものの、原因を見抜けない。「大きすぎて行き場のない悩みをかかえたまま」ひとり重荷を心に秘めて苦しむ主人公。「一時は、故国へ帰らしてもらおうように夫人に頼むことも考えました。しかし、そうしてみたところで、やはり向こうでもわたくしは独りぼっちでしょう。

(…) もうわたくしはだれにもつながりのない、人類全体にとって無縁の者というわけでした。」ウーリカは自分のことを、少くとも夫人には役に立つ人間だと考える。しかし孤独感に押しひしがれて、体の具合は目に見えて悪くなる。「兄弟に対して抱く思いを感じていたシャルルに会っても、気おくれから悩みを洩らさない」。この「優しく実直な人柄」の青年は、兄と家庭教師とともに、二年間のヨーロッパ大旅行に出かけてしまう。

ほどなく大革命の成りゆきが深刻なものとなってくる。「年若く、世間の利害関係に縁がなく、内証の悩みの傷口をなめているしかなかった者でも、革命によってものの見方が変わり、いくばくかの希望を抱くようになった」と告白するウーリカは、「貧富の差が逆転し、身分が混乱し、偏見が消滅することで」自分の居どころが見つけれられるかもしれない期待を抱く。しかし革命の進行を支配しようとする人びとの見苦しさに気付き、卑しい性格に批判の目を向ける。「やがてその人たちの見せかけの博愛思想も化けの皮がはがれてきて、あれほどの苦境のなかでさえ、わた

くしを蔑視する空気が残っているのを見て、希望を持つことをあきらめ」ねばならなかった。

革命の初期に抱いた希望が夢と消えたウーリカの心は沈んだままで、わずかに夫人から寄せられる信頼と親切だけが生き甲斐である。心をゆさぶることとしては、黒人の解放という話題があった。「少くともよその土地には自分の仲間がいるのだ、と想うことはやはり楽しいものでした。その人たちは不幸なのだから善良にちがいないと考え、その身の上を気にしておりました。それが何と、すぐさま自分の間違いを思い知らされることになったのです。サント・ドミンゴの虐殺の知らせは、わたくしに新たな耐えがたい苦痛をもたらしました。つまり、そのときまでは、放逐された種属の一員であるがゆえの悩みであったのが、いまや野蠻で人を殺す種属だということになり、顔から火が出る思いでした。」

革命が急速に進展し、貴族のほとんどは亡命するか、地方に隠退せねばならない。友人知人が四散したあとも、夫人ばかりはパリ近郊に踏みとどまる。亡命貴族の資産は没収されるということになり、イタリアに旅行中のシャルルはパリに戻った。やがてルイ十六世が処刑される。「この大それた犯罪は、夫人にこの上なく激しい苦痛を引き起こしました。気丈な方でありましただけに、この重大犯罪の途方もなさと釣り合うだけの大きな嫌悪感を味わわれたのでした。」ひたすら夫人の気持をおもんばかる忠実な黒人の養女は、恐怖政治の続くあいだは、自分の悩みを意識しない。「あのような大きな災厄のかずかずを前にしては、わたくしごとき者の不幸など、どうして問題にできません。それにだれもが不幸でしたから、孤独感からは解放されておりました。」

元帥夫人に投獄、処刑の危険がないはずがない。しかし幸運にも革命政府の最高権力者のうちの二人が、かねて夫人に対して恩義があつて、身辺の安全を守ってくれている。「そのころの毎日の、薄氷を踏むような不安な思いは、とうてい言いあらわさるものではありません。毎晩の新聞で夫人のお友達らの死刑判決を目にして、同じ運命をたどらぬよう夫人を守っている保護者たちが権力を失うことがありはせぬかと、絶えずはらはらしていたわたくしたち。」

破壊が目前に迫ったとき、ロベスピエールが失脚して、夫人を取り巻くウーリカとシャルルと老神父は胸を撫でおろすこととなる。四人は大きな災難をいっしょに乗り切ったあとの共通の孤独感を味わう。「まるで、不幸のおかげですべてのきずなが締め直されたかのよう。わたくしとしては、あときだけは少くとも、自分が異国の人間ではないと感じていたのでございました。」

この物語の主人公の心に一時ばかりの平安が訪れる。生きる知恵と周囲への温情に満ちあふれた夫人。ウーリカを信頼しあらゆることを相談してくれる頼もしいシャルル。とはいうものの、自分の部屋から鏡を追放して、「まるで子供のように、目を閉じたらひとから見られていないつもり」のウーリカは、夫人を訪れる新しい客たちの好奇の視線に傷つく。「夫人の内輪のつどいになぜ黒人が同席しているのか」のひそひそ話。避難先としてはシャルルの友情しかない。かつてウーリカは彼を兄弟のように思ったが、いまでは母親になったような気持でいる。

そこへ降って湧いたシャルルの結婚話。十六才の魅力的な相手に一目惚れした青年は、自分の気持を逐一ウーリカに報告する。「あのひととぼくととの間に信頼の気持が生まれなくては。ちょうどウーリカ、ぼくたちのと同じようなものがね。——ぼくたちと同じもの、などと。シャルルがわたくしの生涯でただ一つの秘密を知りもせぬことを思わずにはおられませんでした。そのことを聞いてもらいたかった気持は、これできっぱり消え失せました。」

シャルルが婚約者に熱中して、自分の愛情の深さと幸福な結婚の夢を語るのを聞いて、ウーリカは生を呪うまでに絶望を感じる。「この世に生きていて何の足しになりましょう。どうして命をさすかってしまったのでしょうか。だれからも愛されず、独りぼっちで生きるため。神様、どうかそのようなことをお許しにならないで。あわれなウーリカの命をお召しくださいます。」

発熱して床についたウーリカは、シャルルの結婚式に列席できない。妻のアナイスをかならず連れて、夫人を訪問してくるシャルル。男の子が生まれ、だれもが美しい母子の姿を喜んで眺める。いっそう孤独感を味わって、一家の



團圓をうとましく思うウーリカ。夫人だけは養女がやつれてゆく原因に気づいているらしい。ウーリカは家庭の幸福を望むあまり、フランスに連れて来られたことを恨むまになつてゐる。「どうしてわたくしの運命のままに放つておいてもらえなかつたのだろう。そうすれば、お金持の主人に仕える黒人奴隸だつたはず。太陽に照りつけられ、仲間と畑仕事をする事になつても、夜ともなればささやかな小屋に引き上げるのだ。生涯つれそう夫と、おなじ肌色の子供たち。ためらうことなく、お母さんと呼んでくれて、ひたいに唇を寄せにきたことだろう。」不幸な黒人女性は、神に死を求めて祈る。

ある日のこと、ウーリカのところに、かつてその将来を案じて夫人を責めた友人、例の侯爵夫人が姿を見せる。不幸を予知していた立場として、親切心からウーリカに理詰めで立ち直りをすすめるに來たのだつた。「苦痛を癒す解決策がないとき、それに服従することを拒んで、必然性に対して立ち向かうというのは狂気の沙汰ではありませんか。結局は負けるしかないのですから。——そうではございませんが、この場合の必然性というのは、もう一つの苦痛にすぎないように思われますが。」相手が心を聞かないことに苛らだつて、訪問者はウーリカの秘密を指摘する。そしてシャルルに対する恋心を、許されない、常軌を逸した情熱とよめつけて立ち去る。ウーリカの受けた新たな衝撃。自分の感情を、連帯感を求めるものとはかり意識していたのに、それを罪ぶかい、うしろめたいものと批判された驚き。その夜から高い熱を出したウーリカは、三日のちに医者から見放されるほどの状態になり、死の床に告解師が呼ばれる。

臨終の聖体拝領ができない昏睡状態で、終油の秘蹟を受けたものの、ウーリカは奇蹟的に生きのびた。連日ようすを見に来てくれる司祭。二週間のち、ウーリカは進んですべてを告白する。「あたかも年老いた船乗りのように」人生のあらゆる嵐を知り抜いた司祭は、まったく驚きの色を見せない。おもむろに口を開いた司祭は、まずウーリカを安心させる。「あなたの心は清らかなものです。われとわが身を苦しめただけなのだから、そのことに何の罪があり

ましよう。でも神様は、お委せくださっているあなた自身の幸福について、いづれ釈明をお求めになりますよ。自分の幸せを、あなたはどのようにしていますか。それは手のなかにあるのですが。」元氣を出すようにとウーリカをばげましながら、司祭はつづけた。「祈りなさい。神様はそこに、両腕をあなたに拡げていらっしやいます。黒人とか白人とかは、お考えになりません。あらゆる人間を平等に見ておいでです。」

その言葉は、かつて味わったことのない心の平安をウーリカにもたらした。そしてたえず司祭の話を思い返すたび、「まるで豊かな脈脈のように」つぎつぎと新しい考えが浮んでくるのだった。神は孤独な者にも、そうでない者にも、ひとしく義務を与えている。それを心得ていなかったと反省するウーリカ。血縁に恵まれない人びとには、家族がわりに人類全体が与えられている。有名人がしばしば自発的に孤独を求めるのも、あらゆる快楽を投げすて、幸福の源泉を渴望するからだ。「ほんとに、わたくしは何をしていたのでしょうか。(…)人生の楽しみを追い求めて、まことの幸福をおろそかにしておりました。でもまだ、おそすぎはしない。」

自分の立場に目覚めたウーリカは、「あれほどの嵐のあとにつづく平安に驚くばかり」であった。「わたくしは修道女になろうと思ひ定めました。そのことを夫人に申しあげますと、たいへんお歎きになりましたあとで、おっしゃいました。——あなたに良かれと思つて、実はひどいことをしてしまつたのだから、その決心にさからう資格はないようね。」一方シャルルは大いに反対し、考え直すよう懇願するが、幼なじみはもはや動じない。「引きとめないで、ね、あなたのことをいつも思うことが許される唯一の場所なのですから……」

ここで若い修道女の物語は、突如として終る。あとには主治医のあとがきが数行のこされるばかり。「治療をつづけたが、残念ながら無駄であった。十月の末、患者は死んだ。秋の最後の枯葉とともに散つていった。」

(この章おわり)

- 注(1) 『フタールリギェル』については、すでに紹介が行われている。拙論「ウージエーム・シェーの海洋小説」（一九六〇年三月、関西学院大学発行「独仏文学研究」3）
- (2) 『ウーリカ』の現代のエディションとしては、一九五〇年発行のストック版、ならびに一九七九年発行のデフナム版がある。Madame de Duras : *OURIKA suivi de Edouard*, Préface de Jean Giraud, Etude de Joë Bousquet. Librairie Stock, Paris, 1950. / Madame de Duras : *OURIKA*, une édition féministe de Claudine Herrmann. Editions des femmes, Paris, 1979.
- (3) ストック版・ジャン・シロの解説による。
- (4) Madame de Duras : *Olivier ou le secret*. Texte inédit, établi, présenté et commenté par Denise Virieux. Lib. José Corti, Paris, 1971.
- (5) Joachim Merlan : *Le roman personnel de Rousseau à Fromentin*. Lib. Hachette, Paris, 1905. / Jean Larnac : *Histoire de la littérature féminine en France*. éd. Kra, 1929. 前者の第十章、後者の第七章など。
- (6) 花田書房発行、季刊「海浪」の第六号（一九八三年秋）以降（現在第九号）拙訳を連載中。本稿の引用箇所はその一部を用いている。

——文学部教授——